

拠点形成研究交流報告：国際学会参加およびワゲニンゲン大学訪問

JSPS研究拠点形成事業の研究交流として、5月13日（土）から5月20日（土）にかけて、ポーランド・クラカウで開催された国際学会にて成果報告・情報交換を行なうと共に、オランダ・ワゲニンゲン大学を訪問した。

5月14日-17日の日程で、Jagenonian University において、4D Nucleome “The Cell Nucleus in Space and Time”が開始された。この会議は、これまでにドイツ・マインツ、日本・広島で開催され、今回が3回目となる。2015年9月に本研究科に滞在し、CFAI特別セミナーを行なったProf. Jurek W. Dobruckiが、今回の会議のオーガナイザーを務めた。この会議では、生物のエピジェネティック制御に重要な役割を果たす細胞核の機能構造研究における世界の一線の研究者が集まり、最近の研究成果の報告と、それについての論議が行われた。会議全体を通じ、自身の研究成果について報告すると共に、ワゲニンゲン大学・Prof. Geert Wiegertjesとの共同研究に関連した、魚類の免疫応答や環境対応におけるエピジェネティック機構の解析に関連した情報収集を行なった。自身の研究報告として、脊椎動物のエピジェネティック制御に関する核内アクチンおよびヒストンバリエーションH2A.Zについての口頭発表を行ない、発表後の情報交換では、ワゲニンゲン大学での共同研究の課題の一つとなる、魚類の環境対応におけるH2A.Zの役割や、生存状態のゼブラフィッシュのエピジェネティックマーク（ヒストン修飾）を顕微鏡下でリアルタイム観察できる系の開発とその利用について、今後の共同研究展開につながる情報を得ることができた。



国際会議終了後、5月18日-19日の日程でワゲニンゲン大学を訪問するため、アムステルダム空港を経由し、鉄道でワゲニンゲン最寄のEde-Wageningen駅に到着した。当駅は思ったよりも小さな駅で、農業国オランダにおける農業研究の拠点であり、また最近の農学部門の大学ランキングで世界No.1ともなっているワゲニンゲン大学が、日本の感覚からするとかなり小さな町にあることは意外であった。Prof. Geert Wiegertjesの出迎えを受け、案内された水産飼育施設には、コイ、ゼブラフィッシュ、ティアピアなど、主に淡水魚が水循環システムによって保たれた環境下で飼育され、充実した研究を支えていることを知ることができた。

拠点形成事業報告：国際学会参加およびワーゲニンゲン大学訪問

前年度のProf. Wiegertjesの東北大学滞在中およびLorentz Center Workshopの際に検討していた共同研究については、ゼブラフィッシュの免疫応答や環境対応におけるエピジェネティック解析の方法などについて、具体的な計画を立案した。本学分子生物学分野修士学生・横山吟司君のワーゲニンゲン大学滞在についても打合せを行い、横山君が2017年9月から1年間、Prof. Wiegertjesの研究室で、上記共同研究の一部を担当して研究することとなった。さらに、本研究拠点形成事業での研究者や学生の交流の可能性、今年10月に開催予定の二国間セミナーについても論議し、今後、その内容についてさらに打合せを行うことを確認した。また、2018年度中に行うミニシンポジウムについても、今後その開催に向けて調整を行なうこととした。



Prof. Wiegertjesに加えて、今回の滞在中に、昨年に本学に滞在し、またLorentz Center Workshopにも参加したDr. Maria Forlenza、また同じくLorentz Center Workshopの参加者であり、この7月にはCAFIが主催する知のフォーラムに参加するDr. Sylvia Brugmanとも話をする機会を得た。また昨年のワーゲニンゲン大学との部局間協定締結に来仙したProf. Verreth Johanにも挨拶する機会を得た。これらの研究者と会話では、本研究拠点形成事業についても話がおよび、本事業による研究者・学生の交流に対しての大きな期待が聞かれた。

今回の滞在、特にワーゲニンゲン大学訪問では、今後の国際共同研究の推進方法や、学生のワーゲニンゲン大学滞在に関して、大きな進捗があった。このような機会を提供していただいた研究拠点形成事業の研究交流支援に感謝する。

CAFI副センター長（研究担当） 分子生物学分野・原田昌彦